

## 幼児の外国語としての英語学習に関する一考察 — A君の“is it” patternについて —

広島大学大学院 佐々木 みゆき

### 1. 目的

inputとoutputの間には、black box が横たわっていると言われるように、言語習得過程、特に第2言語習得過程の詳細には不明な点が多い。本研究の目的は、ある幼児の外国語としての英語学習の中間言語の一側面の分析を通して、外国語学習のメカニズム解明の一助とすることである。

### 2. DATA

本研究の基礎となるデータは、第1言語を日本語に持つA君(1980年2月生まれ)の4才3か月から5か月の、約2か月間の、外国語としての英語の utterances から採録されたものである。A君は、いわゆる、英語の早期教育を受けている幼児であり、生後8か月から3才6か月まで、単語や絵中心の『リンガフォン子ども英会話』(Linguaphone Institute, Limited)の付属カセットテープ全12巻を1日平均1時間程度、その後4才3か月まで、英語の歌のカセットテープ(『おぼえてたのしいえいごのうた』全20曲, PONY)を、1日平均40分~50分程、家庭で input として与えられている。又、3才2か月から入園した広島YMCA英語幼稚園において、週5日間、1日平均1.5~2時間の自然な、生活の英語の exposure を受けており、A君の英語での communication strategyは、主に、この幼稚園での生活の中から生まれてきたであろうと推察される。

私は、A君の観察を今年4月初旬から開始したが、A君が私に慣れ、私の存在を意識せず、自然にアメリカ人の先生と会話ができるようになるのを待って、5月初旬から幼稚園の一学期が終了するまでの2か月間のA君の communication strategy を記録した。観察は、毎週火曜日と水曜日、幼稚園において朝と昼の自由遊びの時間(計約2時間)にA君が2人のアメリカ人の先生のどちらかとおしゃべりする機会をねらって行なったが、なるべくA君を強制せず、自然な形での会話をねらったため、自由時間の間中恐竜の絵本をながめ、アメリカ人教諭の方へおしゃべりに行ってくれない、などという日も多く、採録無し、という日も度々あった。A君の発話は、全てテープレコーダに録音され、3日以内に、一般的な orthography に従って文字化された。

本研究では、このようにして transcribe された発話のうち、質問に対する yes 又はnoのみの答え、及び歌や rhyme、絵本の中の会話などの rote memorization によって暗唱された言葉を除く 252 utterances を基礎データとした。歌などを除外したのは、これらは意味よりもむしろリズムによって暗記され、少なくとも、このデータにおいては、communication の手段としては使われていないからである。

注：広島 YMCA 英語幼稚園では、独自の信念とカリキュラムに基づいて早期英語教育が行なわれている。毎日の保育は、bilingual のアメリカ人教師(2人)と日本人教師(4人)のペア・ティーチングの形で行なわれ、日常の保育活動の約5~6割程度が自然な英語を媒介として行なわれている。

注：utterance の数え方は、意味を中心に、たとえば、Is it fly. Is it fly. Is it, is it very ups? (It flies. Can it fly very high?の意)を2 utterances としてとらえる方法を採用した。

### 3. "IS IT" PATTERN

この基礎データから本研究でとりあげるのは、“is it” pattern とここで仮に名付けた発話である。これは、彼の発話中最も目立った発話の型であり、全発話中の実に 39.3% ( 99 / 252 ) を占めている。下に、絵本をめぐる先生の長い会話にあらわれた“is it” pattern の一例を示す。

( T はアメリカ人教諭, A は A 君の発話をあらわす。 )

絵本『 Madeline 』より、パリの寄宿舎女学校には、 Clavel 先生と 12 人の少女が住んでいる。ある日、12 人の 1 人、 Madeline が病院へ入院することになる。

T: Everybody had to cry, not a sig

T: Everybody had to cry, not a single eye was dry. ( Madeline が医者に抱かれている下の場面をさして ) Madeline is in his arm.

A: ( 上の場面, 見送りの Clavel 先生をさして ) Is it Miss Clavel crying?

T: Yes, she's crying.

A: ( 下の場面, Madeline が抱かれているのをさして ) In his arm?

T: Yes, in his arm ...

この pattern は、疑問文、肯定文のどちらにも使われ、疑問文では、発話が rising intonation で終わり、肯定文では falling intonation で終わる、という特徴を持っている。

肯定文

e.g. ( A 君, ハリガネのハンガーをもって先生のところにやってくる )

T: What is it, A ?

A: Is it wire-hanger ↘

疑問文

e.g.

A: ( 絵本の中のバスを指して ) Is it bus ↘

T: Yes, it's a bus.

### 4. ANALYSIS

#### 4.1 Is it + ? —— “is it” の次に来るものの分析

“is it” の次には様々な文法的要素が来て、コミュニケーションに寄与している。次に、それぞれの要素を含む pattern の出現回数と例を掲げる。

Varieties of the grammatical elements following “is it” segment and their frequencies

1. Is it + NP : 56

Is it train. ( It is a train. の意 )

2. Is it + (Subj.) + Adj. : 14

Is it cold?

Is it DAIKON soft? ( Is the radish soft? )

3. Is it + (Subj.) + Verb : 14

Is it cry! ( He is crying! )

Is it seven duck swim? ( Are seven ducks swimming? )

4. Is it + Adv. : ?

Is it down? ( Does he fall down? )

5. Is it + (Subj.) + ~ing (progressive) : 3

Is it walking, walking, walking, walking, walking. (They are walking, walking ....)

Is it Miss Clavel crying? (Is Miss Clavel crying?)

6. Is it + how many + (Subj.) + Verb : 3

Is it how many snail? (How many snails are there?)

Is it how many duck swim? (How many ducks are

Is it how many duck swim? (how many ducks are swimming?)

7. Is it + Onomatopoeia : 2

Is it ..... (onomatopoeia of the puffing of a train).

'is it' pattern は、次に名詞や形容詞が来ると、is it の文法的意味が、いかにも正確に理解され、習得されているように見える。しかし、Is it + Adv. や Is it + how many + (Subj.) + Verb などの例をみると、これは、単に、文法的意味の理解なしに、便宜上用いられているだけであることがわかる。

#### 4.2 "is it" segment の役割

それでは、この 'is it' は、A君の発話において、コミュニケーションの成立上、どのような役割を演じているのであろうか。以下に、1) is it が communicative strategy として演ずる役割、2) is it 自体の意味の変化、の2つの観点から、'is it' pattern 以外の発話との比較を混じえながら分析を加えてみたい。

1) 'is it' が communicative strategy として演ずる役割

a 文の beginning signal として

'is it' の後には、様々な文法的要素が登場するが、それらは、'is it' pattern 以外の A君の utterances にも出現するものばかりである。すなわち、'is it' pattern は、'is it' がなくとも、A君の utterance としては成立するのである。その上、'is it' は常に文頭にくることから、'is it' segment は、「これからコトバ(英語)を話しますよ」という、文の beginning signal として、まず考えられるだろう。これは、A君にとっても、又、聞き手にとっても、コミュニケーションを円滑にする上で役立っているかもしれない。

b "とりあえず"の主語として(?)

又、'is it' の次に来る文法的要素を見渡してみると、主語が極端に少ないことに気付く。(7/99)これは 'is it' pattern 以外の utterance にも言えることで(13/153)、主語、特に it 以外の代名詞の主語は、data 中、皆無である。そこで、たとえば下の例のような場合、Is it no happy. や Is it happy. の is it は、それぞれ、代名詞の she と they をかた代わりしていると言えないだろうか。

(前掲『Madeline』の絵本より。Clavel先生は夜中に変事が起こったことを察し、生徒たちの寝室に見まわりに行く。寝室の電気をつけるとベッドの上でMadelineが1人で泣いている。)

T: Oh, she put on the light. Miss Clavel put on the light. What happened?

(A君、絵本の中の泣いている女の子=Madelineをさして)

A: Is it happy. (=They are happy.)

T: Yes, the rest are happy. そうよ。

(A君、絵本の中の他の、泣いていない女の子たちをさして)

A: Is it no, is it no happy. (=She is not happy.)

T: Yes, she's no happy. That's right. She was crying なんでもないてん? Why is she crying?

A: Is, is Madeline no happy?

T: Yes, she's not happy. That's right.

A: Is not happy.

A君はこのとき、“ひとりで泣いているかわいそうな女の子 (=Madeline)” や、“そのまわりにいる女の子たち”を表わす she や they がみつからず、“とりあえず” is it を使ったのではないだろうか。これはあくまで単なる仮説であるが、A君がもし、この“とりあえず” a strategy を使っていたとしたら、これはA君にとって、英語学習上の大きな利益になっているはずである。なぜなら、A君が“とりあえず” is it で埋めた空間は、すぐ次の response で、A君への input として、対話者から、上例のように補充されるからである。

## 2) 'is it' 自体の意味の変化

'is it' pattern 全体 (99 utterances) を、それ以外の発話 (153 utterances) とわかち、最も目立つ特徴は、疑問文と疑問文以外の文の全体に占める割合の差である。'is it' pattern 内で疑問文とそれ以外の文の占める割合は、ほぼ半々なのにに対し、'is it' pattern 以外の発話において疑問文の占める割合は、極端に少ない (28/153, 18.3%)。これは、逆に言えば、発話全体における疑問文 (79) 中、'is it' pattern が占める割合が比較的高い (51/79, 64.6%) のに対し、疑問文以外の文 (173) に占める 'is it' pattern の割合が低い (48/173, 27.7%) ことをあらわしているとも言える。(下表参)

|                 |                    |     | total |
|-----------------|--------------------|-----|-------|
| 'is it' pattern | (utterances)<br>51 | 48  | 99    |
| 'is it' pattern | 28                 | 125 | 153   |
| total           | 79                 | 173 |       |

このことを証明するため、カイ2乗検定を行なった。この場合、帰無仮説は「疑問文と疑問文以外の文で、'is it' pattern と 'is it' 以外の使われ方に違いはない。」であり、自由度は1である。その結果、危険率1%以下で仮説は否定できることがわかった。

つまり、'is it' pattern は、少なくとも疑問文の文頭に、一種の question marker として使われる傾向をも内包している、と言えそうである。実際、data 採録中の後半に、12例ではあるが、平叙文の時のみ、It's + NP (or Adj.) という形が出現している。これは、A君の言語学習上のプロセスにおいて、どういう発話のはじめにも 'is it' をつけてみるという chaotic な状態から、疑問文とそれ以外の文の形式上の分化が徐々に起こり、疑問文により多くの 'is it' を付加し初めたと同時に平叙文には 'is it' という別の形を使い初めたことを意味するのではないだろうか。

## 5. PERSPECTIVE

以上のように、'is it' pattern は beginning signal としての地位を維持しつつも、徐々にではあるが question marker としての意味を獲得しつつあるように思われる。それでは、これから、A君の発話は、どう変わってゆくのだろうか。data を採取できた期間が、2か月という短い期間であったので、長期的予測をたてるのは難しいが、仮説をたてる、という意味では、以下のようなことが言えるだろう。

### 5.1 "is it" のあとに来る要素の複雑化

文構造の複雑さが、習得の困難さを導くことは容易に推察できるので、まず、'is it' segment の後に来る要素が、より複雑化することが予想される。

## 5.2 疑問文と疑問文以外の文の分化

さきに述べた 'is it' pattern の疑問文への偏用、平叙文のみに使われる It's pattern の出現などから考えて、これからますます疑問文とそれ以外の文の分化が進むことが予測される。この 'it's' が、'is it' と同じような役割を果たし、現在従えているような名詞、形容詞以外の要素を後に従えるのか、A君に与えられる input に含まれる英語正文法がそれをくいとめるのかは、今後の観察にまつれる。

## 5.3 正しい文法への歩み

以上の予測は、もちろん、A君の言語学習過程における中間言語の中での予測であり、A君が正しい英語の input を受け続ける限り、A君の言語規則は、その input の背後にある規則に向かって収束してゆくと考えられる。A君が現在 'is it' で代用していると思われる文法 functor のうち、どの要素からその変化が生じるのかは、予測の難しいところであるが、現在議論されている第2言語習得の習得順序なども考え合わせて考察することは、興味深いであろう。

## 6. CONCLUSION

以上により、A君の発話にしばしば登場する 'is it' pattern は、①それが実際の英語文法の中に存在する型である。②しかし、それは、真の文法的理解なしに使用されている。③それは、A君の現在持っている linguistic system では構築できない機能を果たすことを可能にする、という点において、Hakuta (1974: 287-297) の pre-fabricated pattern に似たものだと言える。ただし、A君の場合は、Hakuta (1974) における Uguisu ほどの多量の第2言語の exposure を受けてはおらず、実際の accepted grammar からは、かなり逸脱した独自の strategy となっている。

しかし、ここで、A君は、どの場面においても、context あるいは、対話者の話しかける言葉を利用しながら communicative な目的を果たしていることが注目される。これは、第1言語習得者よりも発達した認識能力を持つにも関わらず、それを表現する手段を持たない外国語習得者にとっては、学習上の大きな motivational 的意義を有するものであり (Hakuta 1976: 333)、日本の外国語教育にも示唆するところ大ではなからうか。

## 7. 今後の課題

今後の課題は、5で述べたような、A君の言語習得のこれからのについての仮説を、観察に基づいて検証し、その背後にある外国語習得のメカニズムを探ることである。

### < Reference >

Bemelmans, Ludwig (1952) *Madeline*, London: Andre Deutsch Limited

Hakuta, Kenji (1974) "Prefabricated Patterns and the Emergence of Structure in Second Language Acquisition, *LL*, 24, 287-297.

————— (1976) "A Case Study of a Japanese Child Learning English as a Second Language", *LL*, 26, 321-353.